

第 7 回市史講座ミニレポート：平成 29 年 10 月 28 日（土）

「島根県（松江）の気象特性について」

講師：谷永守先生（松江地方気象台次長）

今回の市史講座では、島根県内、主に松江市を中心とした気象観測データをもとに、気象の特徴と豪雨災害、防災気象情報の利活用について、松江地方気象台次長の谷永守先生にお話しいただきました。

島根県では、明治 26 年（1893）に観測を開始した浜田測候所が最も古く、次いで昭和 14 年（1939）に西郷、昭和 15 年（1940）に松江で観測が始まりました。長い観測の歴史のなかで集まった膨大な観測データが、気象予報・災害予報に役立っています。気象庁のホームページではそれぞれの地域における詳細な観測データを見ることができ、そこから松江の気象の特性を読み解くことができます。

例えば、松江の月ごとの平年値（30 年間のデータを平均した値）を見てみると、梅雨前線や秋雨前線の影響を受けやすい 6～7 月と 9 月に突出して降水量が多い一方で、その他の月はほぼ平均的な数値を示していることがわかります。これを山陽側の福山市と比較してみると、降水量は年間を通して松江が多いものの、気温はほぼ同じ数値で推移しています。日照時間については、1～2 月、11～12 月の冬季は両市で大きく差がありますが、その他の月はそれほど大きく変わらないこともわかります。

松江の天気の特徴の一つである雪については、「山雪型」と「里雪型」の2種類の雪の降り方があると説明されました。山雪型の場合は、強い北西の季節風が日本列島の高い山々に吹き付けられ、積乱雲が発達し、大雪をもたらします。一方、深々と降る里雪型の場合は、日本海の中・南部に上空の寒気を中心が入り、大気の状態が不安定となって、海岸沿いを中心に積乱雲が発達することで雪が降ります。いずれの場合も日本海側で水蒸気が雪になってしまうため、太平洋側では空っ風が吹き、よく晴れる形になります。

集められた膨大な観測データにより、数百年単位での長期的変化も見ることができます。例えば、日本の気温は1898年から2016年の間では100年あたり約1.2℃の割合で、松江の気温は50年あたり0.87℃の割合で上昇し続けています。また、真夏日・熱帯夜の年間日数は増加し、冬日の年間日数が減少しています。雨の降り方を見てみると、大雨の頻度は増加する一方、降水日数は減少しており、これらの長期的変化はいずれも地球温暖化による影響の可能性が高いとみられています。

島根県における豪雨災害の歴史を見ると、7～8月の梅雨末期の大雨が大きな災害をもたらしており、梅雨前線や暖湿気の流入が原因ということです。人的被害の約8割が、がけ崩れや土石流などの土砂災害です。特に梅雨明け後でも日本海沿岸に前線が停滞しているときは注意が必要で、気象レーダーを見て、同じような場所を発達した雨雲が線状に並んでいるときは警戒を要するそうです。さらに、降り始めからの降水量が月平均降水量を超えるようなときは災害発生のおそれが高いと話されました。

こうした災害から身を守る手段として、防災気象情報をうまく利活用してほしいと言われました。気象台が発表する防災気象情報には、「特別警報・警報・注意報」「気象情報」「土砂災害警戒情報」「記録的短時間大雨情報」などがありますが、それぞれについて詳しく説明をされました。大雨が降った時など、つい増水した川などの現場に見に行こうとしてしまいがちですが、ニュースや気象庁のホームページで情報を集め、何らかの準備をすることを心掛けてほしいと言われました。また、こうした情報を活用する留意点として、警戒期間や注意期間を確認すること、常に最新のものを利用すること、自分が住んでいる地域はどういう状況なのか「メッシュ情報」や「危険度分布」で確認すること、人的被害が大きい土砂災害は雨が止んでから発生する場合があることなどを上げられました。そして、気象災害から身を守るためには、「まだ大丈夫」「自分は大丈夫」などと思わず、最悪の事態を想定した行動をお願いしたいとして締めくくられました。